■しまゆむた

奄美民俗文化の事例
～徳之島井之川和田キヨ嫗の生活史（２）～

本田　碩孝（徳之島郷土研究会会長）

０．はじめに

奄美の民俗文化は多様である。すでに多くの蓄積があることは周知のことである。私は、それが集落や個人の生活史ではどのように受け止められているか、認識されているかという視点からフィールドワークを重ねている。その事例を報告するものである。

今回は、1982（昭和57）年12月28日（第31号）の続きの一部と1990（平成２）１月１日に御教示いただいた分を紹介する。方言文のままがほとんどなので、一部意訳や解説を加えている。話しは次々と続いているが筆者の方で適当に次のように分けてある。項目は次のとおりである。

１カワセミ、２キツツキ、３話のこと、４話の場、５継子と二十日月、６身体の様子、７時間意識の変化、８昼いき、９働きと畑地の荒れ、10大根など、11畑の為、12老いるとは、13一人暮らし、14紬織り関係、15崖崩れで死ぬ運、16伝承者、17「もの言う亀」聞出し、18昔人の知、19ながらの人柱、20霊を見る人、21霊を見られた人、22霊を出さない、23竈を捨てる、24月の糞、25海豚が上がる、26鯨が佐渡に上がる、27父の好み、28犬や鼠は龍宮から、29朝露夕露

１．カワセミ

――くん　コーカンち言ぇーるんせえっ（ゐん）。ありや　いきゃしゅん訳ぃし　うがし言ゅんがにしなたんちきゃ　聞ちねーらんかや。

コーカンぬくとぅや　知らり。

（意訳・解説）カワセミ（川蝉・翡翠）をコーカン（直訳・川神）と言う。訳は不明。「コーカンのことは知らない」。川でエビ（タナガ）を獲っているのを見るが、沖永良部島ではタナガクレバト（エビをくうハト・岩倉市郎『沖永良部島昔話』280頁）と呼んでいるようだ。『奄美分類方言辞典』、『与論方言辞典』（菊千代他武蔵野書院）では共通語索引「かわせみ」で見出せず、『喜界島方言集』『与論島語辞典』（山田實おうふう）は共通語索引を見つけきれなかった。奄美本島でカンドゥリ（神鳥）と聞いた気がする。赤ショウビンと同様に巣などにいたずらをすると頭が痛くなるなど鳥保護の思想があったのではないかと思うが課題である。なお、与論出身の町健次郎氏（瀬戸内町郷土館学芸員）は「与論にはカワセミがいないのではないか。それで言葉がないのでは」と言う。喜界島郷土研究会の生島常範氏も「即答できない」と言う。鳥も減っているが方言も消えつつあるように感じる。

２．キツツキ

キーチキャぬくとぅや　あたんせえっ。うやがなしぬ　□なたんとぅ、「っいゃーや木ぃ　ちっち暮らせ」ち。

うやぬ、昔ぬちゅぬ　うがし話しあてぃさんきぃどうあんぬやっ。うがしテーキバナシま言―なてぃやっ（うがしだれん。うまがいいーとんわ　なるわけぃだれんよ）。

昔ぬ話や、昔話やいろいろ　あーむ　な

てぃやっ、昔ぬちゅや。

（意訳・解説）啄木鳥のことはあった。親が死にそうになった。啄木鳥は化粧してきたら親の死に目に会わなかった。神が「木をつついて暮らせ」と。スズメの話が脱落しており「雀孝行」の断片を語っている。これもテーキ話と認識している。

3．話のこと

話ぬくとぅ、ムンバナシち言ゅーむんだ。昔ぬちゅや、ムンバナシち言ゅーむんあたんせえっ。うわさぬくとぅ、ムンバナシどうやこうやち言ゅーむんあたしが。

――テーキバナシとぅムンバナシや、いきゃし違ごえるんが。

てぃーちあらめぃ。むんばなし。あまなてぃムンバナシぬ。いちか話し声のくとぅをムンバナシち言ゅんわけぃあし。「隣なてぃ　ムンバナシぬ聞きゃるん」ち言ゅむんあたんせえっ。

あらむ言ゅんちゅやヒンギバナシち言ゅんせえっ。「ありが言ゅーむんやヒンギバナシだ」ち。いちから嘘のこと言ゅんちゅやヒンギバナシち。「ヒンギバナシしな」ち言ゅむんあんせえっ。

――タンギャタレち言ゅんとまあれるんちよ。

タンギャタレ。わんにま聞ちゃんくとぅぬ　あんで、タンギャタレ。ぬぬくぅとぅがら　あてぃねしがタンギャタレち。うりが意味や分からしが、タンギャタレち（ヰノなてぃだれん？）。われんぐぁあり、うやんきゃぬ言ゅーむん。タンギャタレち言ゅーたしが。

わきゃま昔ちゅや。うやほうがなしぬ言ゅたんくとぅ。タンギャタレぬやっ。聞ちゃんうべぃが　あーむなてぃやっ。なーっ、しか、大正ぬはじめぃなてぃや（うがしだれんよ）。

（意訳・解説）話のことをムン話と言う。テーキ話（注１）との違いを聞くと同じと意識している。具体的にひそひそ話し声が聞こえるのもムン話と言う。嘘を言うことをヒンギ話という。伊仙町喜念などではタンギャタレ（注２）などと言う。具体的にどのような話をさすかなど課題である。

注

1）「諺の類にもテキバナシといっている」「教訓的な内容を持った小話や世間話の呼称でもある」（松山光秀著「徳之島のことわざ」『南島説話の伝承』福田晃他編三弥井書店1982年）

2）「解説」には他の集落の呼称もあるが省略（田畑英勝編日本の昔話７『奄美諸島の昔話』日本放送出版協会1974年320頁）

4．話の場

昔うやほうがなしんきゃぬ。（上野、旧姓杉）チルばーた爺た、ヤウサダ爺ぐぁたがわきゃヤかち　もーちか、話ちかやっ。「昔やいきゃし　しゅーたん、かーし　しゅーたん」ち話ちかやっ。うりし、あんちゅぬ爺がねーかま聞きゅたんちよ。ヤウサダ爺ぐぁた　話ち聞きゃしゅたしがえっ。わきゃ、じーとぅ、くまマタバラヤドゥリぐぁあり　もーるたんちよ。

「へーだれんぐぁ」ち。「もーれ」ち言ちか。いろいろムカシバナシ。いきゃし語ろたんが。わーしてぃ　なっ。めぃじゃしめぃじゃし　昔聞ちゃんむんをば　めぃじゃしゅんにしかやっ　うべぃるんあんぎあしが、わーきゃま　しか　脳がとぅけぃてぃ、わーしてぃ　うべぃらしが。たまーにめぃーじゃしゅんとぅきぬ　あんちよ　うねぇ。はーっ、うがしうがし話しゅたしがえっちやっ。

――うりをば、ノートな書きじゃちゅきしょれよ。

っいゃーんが言ゅんがにし、書きあてぃしゅーきばや、うべぃるしが。きーさ　うんがちぎ　いじか　わーしてぃえっ。品むん　こーいがち行じか、きっさ　うま行じか　わーしてぃえっ。

（意訳・解説）夕食後など近所の古老たちが訪ねてきて昔の話などをよくした。思い出すものであればすごいが忘れてない。たまに思い出すこともある。書き止めておけばよいがわすれる。

奄美は民話などの伝承が豊であることは間違いないと思うが、具体的伝承の場面の記録は少ないように思う。ひとつの例である。

５．継子と二十日月

はちかぢきや、まんまぐぁぬ　ゆぅうぃかみ　うりち言ゅーしあんぎぃや。

――うりや　いきゃしゅん　話だれんが。

まんまぐぁ、うりや、ぬがー、昔ぬ　うやほうがなしぬ　はちかぢきぬ　うさがりや　まんまぐぁぬ　ゆぅうぃかみ　うりち。うにんたな　まんまぐぁや　ちこてぃえっ。ぬーせ、くいせーち　うぃーまわち。はちかぢきぬ　ちきぐぁぬ　うさがたんとぅ、うにん　ゆぅうぃ　かまちゃんち。うったけ　いちか　まんまぐぁち言ゅーむんや憎あんしじ　あし。はちかぢきぬ　うさがらんま。はちかぢきぬ　うさがりや　まんまぐぁぬ　ゆぅうぃかみ　うりち聞ちゃんとぅ。

（意訳・解説）二十日月のあがる頃が継子の夕食時という俚諺的な言葉がある。それまで継子を働かせて月があがったので夕食を食べさせた。

それ程、継子への対応は厳しかったのだろうか。『奄美のむかし話』（拙著、奄美文化財団2007年）に13話ほど紹介している。

以下1990（平成２）１月１日の御教示。

６．身体の様子

ヤーだろあん、あむさんごしか、うりうりうりー（お茶菓子などをすすめてくれる。くりちまみ　まーあんで。なー先ぬまんじょうや）。しぎゅとぅま　はりはり　さーらり。しーか　すぐん疲れてぃか　だろはんぬ　しーきらんごなり。はー、とぅしやとりちゃくねんどーヒロタカさん（むーるうがし思とぅれるよ）。

（意訳・解説）お茶、菓子などをすすめてくれる。家で過ごすのにも疲れる。仕事も張り切ってできない。すぐ疲れがでる。年はとりたくないよ。

「ヤだろあん（直訳・家だるい）」は、家におれば、それだけで疲れるというような意味だが、珍しい使い方である。老いの身体状況。

７．時間意識の変化

ふーん　とぅしぬ　一ヵ年行きゅむんやむんねぃしらんせえっ。一週間ぬドラマにーちか、いっきゅた　いっしゅー間　ねんごなるんせね。ひと月ねんごなるんせえっ。

われんありんや、一年ぬながー、いちん正がち　きゅーむんがいーち思ゅむ　あたしが。

浜ぬ長浜か、あっちち、ぎりーぎり、しょうーがち、裸足にし。

へく　正がちぬ　ちーたはむ、へく浜をぅりぬ　ちーたあむち思ゆむ　あたしが。

なーや、ゆぬ中。かし　ゐーゆぬ中なたんとぅきゃがら、日にちぬちきゃーち言ゅーむんや。おんなし日にち　あーむや　あしが（一部不明）。

（意訳）１年の過ぎるのは「（直訳）ものを見せない」という表現はめずらしい。テレビドラマを見ているともう１週間・１月が過ぎたかと思う。

子どもの頃は、１年間は長く正月や浜下りが待ちどおしかった。今は良い世の

中になり、１日が短い。昔も今も同じ１日なのに。

8．昼いき

ひるいき　さんま　なっ　いきゃんち。昼いき　しゅんちよ。あしぃ　かーでぃかすぐん。なーや、ゆっくり　じゃや。ゆーえーりや　どぅんなーりやっ。

（意訳・解説）昼いきしないといけない。昼めしを食べてすぐする。今はゆっくりだ。夜明けが遅いから。

「昼いき」という言葉は、昼にゆっくりする意味なのが珍しい。聞いた経験がない。「ちゅーいき」は、ひと息、ちょっと休むなどの意味がある。昼のくつろぎのようである。

9．働き具合と畑地の荒れ

うがしなてぃ　はる行じま　チョチョチョちどぅ　さーるんぬ。ハリハリとぅ　さってぃか　あーしが。

はるま　ゆーじね。アラジなさん程度ぬしこぐぁどぅ　さーるんぬ。草ぬな。草ぬなっ、フーメィ草ちがんだえっ、うりうりめぃーてぃ。

（意訳）畑でもちょこっとしか仕事ができない。張り切って畑仕事ができるとよい。畑も雑草（フーメィ草、和名不明）が繁って荒れている。

10．大根

わーデークネィや　いきゃしがやちかむーる　さーかち　むーてぃ。アンバ虫ぬあむさんとぅ。アンバ虫ぬ予防ま二回さーしがえっ。うんか　なーじくぐぁぬ　かっしにしゅしが、なーじくぐぁぬいじぃてぃち。さーば　むーる　とぅてぃち　わーしゅわ。かーべんしゅむ。はーっ　しじぬいっち。うっしゅむ網なーてぃ。キリブシしーま　ゆーじねーやち思ゆんちよ。しじぬ　いっちゃんげぇか。

むんちくりま　やっぱり。□言ゅーしがむんだま　作らだてぃか　ゆーじねむえっち。わーなっ、うっさな・・。

（意訳・解説）大根も雑草がしげった為によくできていない。成長せず芯ができている。

作物も手入れをしないとだめだ。「むんだま」もあまり聞かないが、だめな場合に使う。

11．畑の為

えっ、タネィムン三千円がちんべ。こーゆんだ。うっさがち　こーてぃたーえっちどぅ思いや　しゅーり。かっしゅむ　やっ百円べな百五十円べなし　あんど。

あーしが、また、はて　うむさんげかアラジなりなてぃ。わんが　さんご　なてぃか。秀夫や、うがし言ゅんちよ。「いちんかさんごなてぃかアラジなりあらや」ち。なるほど　いちんかやアラジなりや　なり。なりや　あしがや、わんが生きちゅる　まぎり、どぅくあん　まぎり。ぶーんとぅさーらんごなてぃか仕方ねんせえっ。さーる限りぐぁやしー、うがし　手ぃっさまたたんごなてぃ、いんきま　ならんごなり。むんまかまらんご　なり。うにんや　なっはんなぎぃり（笑い）。うがしあしが、あっかる限りあっち、どぅや、やみゅんと　やーでぃまやっ。気張てぃ　しんにゃしがち思ゆ。考げてぃや　をぅーしがえっ。

（抄訳）種物などいろいろ３千円分くらい買う。できた野菜を３千円分買った方がよいと思う。種子を買わなくてもよいとも思う。しかし、何も畑につくらないと荒地になる。自分が出来る限りはしたい。すっかり出来なくなったら仕方がない（2006年には、畑仕事などできない様子）。

12. 老いるとは

はーっ、うがしあしが、かっしにま　うーむんなとぅむされーち思ゆんむ。

おとろっか。□よーりしゅてぃか　睡眠不足しか　ちまらんぎあんせね。うがしかまた寝ぃんで、また　五時に　しばりにうふーあるんちよ。あぐまーむなてぃ。五時や　ふぇーあんせえっ、うがしか　また寝ぃんであんちよ。七時半べーなてぃか□あがんま　行きならんご。

護岸行じ　じーとぅ　かし　しーちよ。くし　ぬばちゃりえっ。しょーがち　なてぃ　うがし　さーしがやっ。首かしいんかちゃり、肩うんぶり　さーり　ぜーとぅ□うんか　ぎりーぎりぐぁ　ふぇあんとぅきや。あんまり遅くなてぃか　ぬぶーり　あっからんせえっ。ちゅに□さってぃ　あっからむなてぃ。はやーんとぅき　あっかるしがやっ。

□あっからむなてぃ　ぬぶてぃ　にゃんだ。いちんがら　わーきゃ　ぬぶたんせえっ。うにんニギャナ取てぃち　うにん　ぬぶりなり。うんなり行きゃ。

いるいる　くしょうぬうくりたり、いるいるさーりしか。しぎゅとぅぐぁ　さーり。

(意訳) こんなに老いるものだ。目が覚める。睡眠不足になるといけないと、また寝る。７時半頃起きる。護岸に行き、腰を伸ばしたり、首を動かしたり、肩を振ったりする。あちこち故障が出たりして仕事ができない。

13. 一人暮らし

わーきゃがり難儀なむんだやっ。やんべぐぁ　さりり。うがーんうがーんぬ木ぃ切ちちみ。墓行じ　さりり。いなぐ　はんぎぃり。はーっ、ゐんが　じぎゅとぅま　さーんま　しまり。ヤぬ　まわり。うなぐじぎゅとぅま　さんま　しまり。内まおろま　さんが　しま。うがしなてぃ　なんてげな　あーむ　しま　たーむ。

(意訳) 一人で何でもしなければならないから難儀なものだ。庭掃除。あちこちの木を切って積む。墓に行き掃除したり、砂を運んだりと男仕事もしなければならない。内まわりなど女仕事もしなければならない。

14. 紬織り関係

なんてげな　あーむしゅんとぅきや　っあよねうちぐぁや。っゆくりが　はやーむなてぃ　ゆなべぃぐぁ　また　八時べーんたな　ゆなべぃぐぁ　しゅんちよ、うね。

なんてげな　ゆなべぃま　さんご。ごっしゅん（５寸）べな　うるむん　あたしがよ。なーや、ちゅっぬぎどぅ　やっとぅんうる。

――ちゅっぬぎちか、何寸べーだれんが。

２寸５分か３寸べ　あらんせ。っわや、２寸５分ち思とぅしがやっ。針ね、□どごろしむんぬえっ、うりうり　まるきり　はかどらんノロなてぃ、マサ子（キヨの姪、名瀬市在住）に　うがし電話けーたしがえっ。「うがしにしか　しめ機ぬちゅに　なんが　うがし言ちにゅん」ち言ちゅしが。「っわっなー（不明）ゐんがむんぬ　きっこうがら（亀甲柄、龍郷柄ともいう）うくりちがり」言ちゃしがえっ。「あり　□うくらいー」ちがり、っわっ、言ちゃしがえっ。「うがしにしーか　うりちゃくねんどー」ち。うがしなてぃ、あり　うちゃげぃたんちゅぬ　「しめ機し　うちゃげぃたんちゅぬ奥さんやゆたーあたんで」ち（不明）かんうくりむんあしがえっ。

「あーあー、はじめぃてぃ。こんなノロうちゃげぃたん　くとぅや　ない」ち言ちゃんち。うがしなてぃ　うちゃぎぃたんちゅま　わかとぅむ　なてぃや。うりならんちよね（不明）。

(意訳) 日暮れがはやくなり、夜の８時頃ま

で夜業の紬織りをした。今までは夜業をしなくても5寸ばかり織ったが、今は2寸5分から3寸がやっとだ。今回織っている紬はとても面倒なので姪に電話をかけたほどだ。締め機をした人でもはじめての紬だと言ったそうな。それくらい面倒な柄で、織り慣れているきっこう柄を送れと言ったほどだ。

15. 崖崩れで死ぬ運

――うりから　めー聞ちゃんくとぅぬあれるしが、ヤーたっち行きゅんとぅき、崖ぬくんでるんち言ゅん話。ッイャージぬ話。

嫁入りぬ話（ゐん）。

――嫁入りしゅんとぅき、崖ぬしゅーかち行じゃんとぅきゃ、くんでてぃち・・。

うり、っいゃーきゃ爺（本田喜志宝）がどぅ話しむん、わきゃ聞ちゅてぃ。聞きむんだ。

――うり　いきゃしゅん話あれたんがやっ。

ゆだりしーが　行じゅたんとぅきゃがえっ、　たーり、シマぬちゅぬ。ゆだりしーが行じゅたんとぅ。うう雨ぃぬ降たんとぅ。エーかち雨ぃはりらしが行じゅたんとぅ。うんから、神様んきゃぬ　しっち、

「ゆさりや屮ノなゐんがぬくぁぬ　まーりり（ゐんがぬくぁちがら　まーりり）。カンニなをぅなぐぬくぁてぃごらろあ　まーりるしがら。うんから、何年後いじ　なったり一緒になるしが。うにん　また　雨ぃぬ降ぅーてぃ　しっち、エーっち雨ぃはれぃらしゅしが、うにん　くんでや　崖ぬうむしっち（はんてぃてぃち）うんなてぃもーりしゅんちがら」聞ちゃんとぅ、うり聞ちゅむなてぃ。

ちょうど聞ちゃんがにし　どぅーどぅぬくぁぐぁ　あーてぃ。うんくぁが　うがし嫁入り　しゅんげぇしなてぃ。

うにん雨ぃぬ降たんとぅきゃが、エーかち雨ぃ　はれぃらしが　行じゃんとぅきゃがら。うにん、うり聞ちあーむなてぃ　雨ぃはれぃらさんご。嫁をば、娘をば、

「へぇく　そーてぃ。雨ぃはれぃらち　しまん」ち飛びじゃちゃんとぅやっ。とぅびじゃしとぅ　まじな　エーぬ　くんでて　ちゃんち。うがし　うんなてぃ助かたんち。

やっぱり、うっさ神様ち言ゅーむんや。七人ぬ神様ぬ　よろてぃ　位ちきるんち言ゅんせえっ。クレち言ゅんせ。昔ぬちゅぬ言ゅーたんせね。

アーち　まーりりとぅ　まじな　七人ぬ神様ぬクレくーるんち。クライたぼちやっ、ブギンなるしま、ビンボなるしま、偉いちゅなるしま　うむち言ゅしが。クライたぼるむ　あんべだ。

――七人ぬ神様ちか、いきゃしゅん神様だれんがや。

いきゃしゅん神様がら、っわっ、うん神様やあてぃねしが。いちから　七人ぬ神様ぬ　ゆろてぃ　まーれてぃ　きゅる　うりたが、クライちきるんち。

――っうりや、シューイットゥぬクライ、ガラデクぬっちがぬ話や聞ちねーらや。

っわっーきゃ　うっしゅむんや　あてぃね。うなぐや、シューイットゥ、ぬーイットゥ、シューイットゥちがら言ゅーたしがえっ。わーきゃトゥミアキあじゃた（注1）あてぃあたしがえっ。

（意訳）2人が漁りに行ったら、大雨が降ったので、洞穴に入り雨宿りしていた。（うつらしていたら）神様などが来て、「今夜井之川に女の子が産まれ、隣村の神之嶺には男の子が産まれる。何年後かに二人結婚するが、その時も大雨が降り、洞穴に雨宿りに入る。崖が崩れて死ぬ」というように聞いた。それからちょうど聞いたように自分の子が嫁入りするようになった。嫁入り途中に雨が降ったら洞穴に雨宿りに行った。「娘を早く連れて行け。雨宿りするな」と言って皆が飛び出した

ところ崖が崩れた。それで助かった。

それだけ神様の言うことはね。産まれると７人の神様がクレ（くらい、運命）を付ける。

（解説）大島本島南部では、木が倒れて死ぬ運命（圧死の運）をさけるが、徳之島では崖が崩れると伝承している。昔話として整った形ではないかもしれないが、管見の範囲で「崖が崩れて圧死すると聞く」徳之島では初めての記録である。身近な叔母が伝承しており吃驚した。田畑英勝『徳之島の昔話』（１９７２年）の註に名瀬　久留義高氏の伝承と岩倉市郎『喜界島昔話集』四四「運定め（二）」に「崖が崩れる」例を記している。

注

１）父の呼称を他人が言う場合、長男、長女の父と言うのが普通。富秋の父（藤福秋）。久子あじゃ（長女久子の父、本田富隆）。場所を言う場合もある。ナダぬあじゃ（名田のお父さん、安田福忠）。ハマぬばぁ（浜の叔母、和田キヨをわが家ではさす）。直接名前を呼ばないのは童名や名を呼ばれることは従う（「大工と鬼六」）民俗文化などと関係するのか課題である。

藤福秋翁は、ヰノぬカテウリかつぎ売りの一人だった。拙編「徳之島の口説」（島尾敏雄編『奄美の文化　総合的研究』法政大学出版局１９７６年）として口説８話報告している。民話の伝承者でもあったろう。

16. 伝承者

っわーきゃま　昔ちゅや、昔ちゅじゃやっいゃーきゃが爺がにか　むーる聞ちあーむなてぃどう　わきゃ　うり知っちゅんで。

ヤウサダ爺ぐぁた、サワディン爺ぐぁた、むーる　うんちゅきゃにかやっ、いろいろ話聞ち。

（意訳）私なども昔の人だね。編者の祖父（喜志宝）から聞いているから知っているのよ。杉ヤウサダ爺、杉澤伝爺などからもいろいろな話を聞いた。

17.「もの言う亀」聞出し

――カメィぐぁぬ　むん言ちゃんち言ゅん話や　うべぃじゃせらんせ（亀と瓶がある）。

和田：カメィ。

――ゐん、亀ぬむん言ちゃんち。しょーがちぬゆる。

和田：しょーがちぬゆる。

――とぅしぬ　ゆる。

和田：聞ちゃんくとぅ　ねー。

――　うん行じ、ゆだりあてぃ　しーくんばち行けたんあんべ。むん言ゅーむんぬ聞きゃるたんべちよ。ぬがいーちにちゃんとぅきゃ（ゐん）。亀ぃぬむん言ちゅたんち。

うぃんやーえーてぃ　なんするか　くんやーえーてぃ　なんするか　うやぬみょうーじ　たかぬ　みょうーじ

ち言ぇーたんべちよ（ゐん）。・・

和田：っいゃーきゃ　こーはたぬ爺や、うがし言ゅんちゅ　あたが。

うぃんやーえーてぃ　なんするか　くんやーえーてぃ　なんするか。いきゃてぃごろあちゅてぃ話しゅんちゅ　あたしが。

亀ぃぬ　うがし言ちゃんち、うんかちゅだり　しーが行じゃんとぅ。えっえーぇ、ゐん。はいんぎゃえー（感嘆詞）。

――うん亀ぃしブギンシャなるん訳ぃだれん。

和田：うん亀ぃし（驚いて確認）。

――カメぬむん言ちゃんとぅきゃ、賭けぃしゅん訳ぃだれんよ。「むん言ゅんはずねん」。「むん言ゅん」ち、賭けぃたん訳ぃだれん。

和田：はいんぎゃえー。うんカメィぬくんでや　あむし　ブンギンなたん訳ぃじゃや、ふぅーん。

――聞ちねーらや。

いるいるぬくとぅ、やっぱり　ありやあーむんじゃやっ。

――うん話ぐぁ　聞ちねーらや。

わきゃ　あんまり詳しくねー。

（意訳）大歳の晩に炊く米もないので漁りに行く。亀がものを言う「上の家をあけて何になるか。下の家をあけて何になるか親のみょうじ、たかぬみょうじ」。それが元になり金持ちになる。

（解説）井之川で「もの言う亀」は『池水ツル嫗昔話集』と嫗の姉（『本田メト嫗の昔語り』）でも収録している。妹は伝承していないことが解った。

話を御教示していただく時に、私も時には話を提供する。相槌を具体的にはどうするかの記録は不十分と思っているからだ。それを試みている。「ゐん」、「えーっ」、「えっえー」、「はいんぎゃえー」、「ふぅーん」等々が具体例である。

田畑英勝氏の先行記録（『奄美諸島の昔話』320頁）などの検証が課題である。

18. 昔人の知

はいー、昔ぬちゅや、むーる　いるいるあてぃあたしが。ぬがちか、なんきゃやテレビぬあむなてぃ、テレビにゅしが。昔ぬちゅや、むーる　よろてぃ　あねー、はなちゃり、うっしゅんくとぅどぅ楽しみあたんきぃやっ。

わーきゃが　われんぐぁ　ありんたなまうーむんがねーむんなてぃ　ナーダンバリぐだーり。ぬっちがや、ムシアシビ。むーる浜しっち　あしでぃ　うがし　かいるむあてぃだ。

なーやしか、ヤか　いじりご　いらんせね。ヤな　ちゃーんとぅ　うむが　あむなてぃや（おぅ）。

（意訳）昔の人々の知は、寄りあって話をしたりするのが楽しみだった。今はテレビなど外の楽しみが増えた。自分が子供の頃も虫遊びの行事などは名田からも浜に下りて遊んで夕方帰るものだった。今は外に出なくてもよいからね。

19. ながらの人柱

――あんまり　むん言ゅむんや、ナガラバシな　ちまるんち・・。

むん言ゅーむんぬ　ナガラ橋なちまるんちよ。

――うりや、いきゃしゅん話だれんが。

うりや、うーん　昔ぬあまな　あたんくとぅ　あんぎぃや。木曾川ぬ。昔、生きうんび、ちゅー生きうんび　しーか。あのながりらんち言ち。うしゅん話ぬあたんせ（おぅ）。うりま　てっちむん。くんでや、くぁーはんぎぃてぃ　橋工事し、ながれぃてぃ。じーとぅ橋工事　しゅーたんとぅ。くぁーはんぎぃてぃ　ちがら　ゐりやりギン　ぬっちがやっ、　「ゐりぬ　やぶりとぅんキン着ちゅんちゅ　うんでぃから、工事ぬ。（橋の流されるのが）止ぅまるんてぃごろあ」ち言ちゃんとぅ。あとぅ　とーとどぅぬキンぬゐりやりギン着ちゅてぃえっ。うむ　さま　おからんご　なたんとか。

わーきゃま聞ちゃん　うべぃぬ　あーしが。

うりし　むん言ゅーむんぬ　ナガラバシなちみゅんちやっ。うがし　爺ががら　話しゅたんで。

――爺ちか　たんだれんが。

喜志富爺よ、わきゃ産ちゃる。あんまりむん言ち　しまむんち。

（意訳）「ながら橋に積まれる話はしりませんか」。木曽川に生き埋めにされた話と同じだ。橋の工事をしていたら、よく流された。子供を背負った人が「ゐりが破れている着物を着ている人を埋めると止る」というようなことを言ったそうな。誰か探したら、言った人が埋められるように

なったと父から聞いた。「いらんものを言うな」と父は寡黙な人だった。

もの言わぬ嫁、キジも鳴かずば撃たれまいなどは欠落している。

20. 霊を視る人

――うりや、ヤナギ爺が　くとぅや　ぬんか　うべぃじゃせらんせ。

ヤナギ爺（ゐん）。ヤナギ爺や、わきゃわれんぐぁあり、うんとなどぅ　をぅたんあんべあしがえっ。

――ぬんとぅしぬちゅぬ　シキャタとぅりが　きゅんち。

うり　あらむがら、ほんとーがら。

「あね、あね、シキャタとぅてぃ行じあね。ありや　あがし　うちんち　きゅーむなてぃ　ありが　ちらや　わからり　あね」。ちら　かし　はんさげぃてぃ　きゅんちゅまをぅーり、ちら　かっくちゅてぃ　シキャタ投げぃてぃあむ　しろてぃ　かーでぃ行きゅんちゅま　をぅーむん　あたんべちよ。

「あね　あね　ありや　ちら　かし　かっくち　きゅーり　たんがら　分からん」ち。

ちら　かし　はんしゃげぃてぃ　ちーか、「たーん」ち。

「っいゃーマブリぬシキャタとぅりがちゃんだ」ち、うりたヤ行じ言ちかえっ。うりや、マブリゆし　しかえっ、ゆたーあむなてぃ。

昔どぅあんぬ、なーや。

ちゅーぬ　もーりさんげぇえか　おとろあん。ちゅーぬ　もーりし　みきゃみなんかち　なたんげぇか　おとろあん　ちぢきならむ　あたしがえっ。

なーや、うっしゅんくとぅ　ねんけぃにおとろくねんせね。

（意訳）「ヤナギ爺のことを知りませんか」。私が子供の頃は近くに住んでいたそうな。本当かどうか知らないが、「あら、あら、シキャタ（注１）を拾いに来た」。「あの人はうつむいて来るので顔はわからない」と。顔をあげてくる人もいるし、隠してくる人もいる。シキャタを拾い食べて行く人がいるそうな。顔をあげて来たら、その人の家に行って教えてあげると「マブリゆし（霊寄せ）」をすれば良い。昔は人が死んでミキャミナンカになると怖かったが、今はないから怖くないがね。

注

１）葬式後に行われる三日別れに棺を担いだ人などが、煎り豆をまく。それをシキャタという。詳しくは松山光秀著『徳之島の民俗［１］』（未来社２００４年）の「徳之島の葬制」１１８頁参照。

21. 霊を視られた人

ヤナギにゃや、うがしあしが、いろいろ言ゅーたんだ。ありや　むん　にゅんちゅあたんがらえっ、

「あねあね　あがん　あがしに　ぬってごらあ　行じゅり　あね　あね。あがしに　ちーぶく　はんじゃち　うがし　シタメィてぃっ　ちし行じゅり。シキャタとぅてぃ行じ　あね　あね」ち言ちゃんとぅ。うりやたんがち言ちかMキュウぼーがとぅじ　あたんちえっ。うりや、ヤーなてぃ　シタメィしー茶碗あろい　しゅーたんち。マブリにち　うんがまりか　うーてぃ行じゃんとぅ。体や、うんなてぃ茶碗あろいし　マブリや、シキャタしろてぃ　ちーあしえっ。

（意訳）マブリ（霊魂）が、シキャタを拾いに行っていた。霊視する人に見られた。ヤナギ爺がマブリ（霊）の後を追って行ったら、本人は家で茶碗洗いをしていた。

22. 霊を出さない

昔ぬちゅや、よーあ　思とぅむなてぃ。言ちから、ちゅーぬ　もーりし　みきゃみなんかぬ　とぅきんきゃ　寝ぃんどぅむうーち　ゆぅうぃ　かましゅむ　あーてぃあらや。よーあてぃか、シキャタとりが行

きゅんち（笑い）。

うりま迷信されーえっ。話がら、ぬーがら解りやさーしがやっ。なーがり　うっしゅんくとぅぬ　あーりや。

昔や、ちゅぬ　もーりしゅにしか　おとろあんぬ　みきゃみなんかち言ちゃんげかマブリ抜げぃてぃ　うーむち言ち　ふーんおとらあん。

（意訳）昔の人々は。食べ物も十分でなくひもじい思いをしていた。葬式後の三日・七日別れの儀式（ミキャミナンカという）があると、子供などが寝ていても起こして食事をさせた。霊がシキャタを拾いに行くのを心配してだ。それも迷信だろう。

23. 竈を捨てる

昔、うなぐぬ　もーりしか　カマくんやち　かてぃてぃ　トーランクなちめぃてぃかてぃてぃ　行きゅたんせえっ。うがし　あんとぬ　うりぐち浜ぬ、うんとぬ　なあぬヨシオにゃたが、うりぐち浜　うま　ごみ捨てどん　あたんせね。

昔、っいゃーきゃが　われんあり　浜うりヤドゥリ　うぃーぬ　うんとなやっ。トーランクにちか　おとろあんち　ひんぎぃり　ぶれく　しゅーむん　あたしがえっ。

ぬぬ為ぃし　あんカマはんなぎぃるたんがやっち。うりが　また　ひんまらーん。

――カマや、でぃんとぬ。

ヤーなてぃ　っまち　めーちゅんたんカマよ。

――トーグラぬカマだれんや。

トーグラなてぃ　くんでや　むんしーどんぬフーガマ。ハンシンにゅんせね　いちか　うなぐが　カマちこてぃ　むんしゅむなてぃ。しか□カマんたな　はなぎぃらんば　ぶーんとぅな、むん　めーはるんちあらんかや。

――フーヤぬカマだれんや。

フーヤぬカマよ。

――ウィンヤぬカマあれらや。

ウィンヤぬカマがら、炊事場ぬ　むんしゅんとぬカマあらんせ。

――っわっーきゃあまや、ウィンヤぬカマち言ぇーるんで。うまなどぅ　ウカマガナシまちとぅたんち。

あら、むんしゅんとーぬカマ。

――カマぬたーち　ねんとや、むんしゅんとぬカマち。

わきゃや、しゅーなていどぅ　むんしゅーんぬ　うぃーなカマねーだたんとぅやっ。っわっ、カマ、ぬが　はなぎるるや　うりが　ねぃーどぅ　ひんまらー。

っわっきゃが　われんぐぁあり、トーグラあてぃ　くんでち　ヤつくてぃかやっ、□

――しょがちんきゃ、とぅしぬゆるんきゃっまち　けーちか　いきゃむんち。

昔ぬちゅやよ。っまち　めーち　っなーんきゃ　っまち　めーさむ　なてぃや。

（意訳）昔は、一家の主婦が死ぬと竈を壊して棺を担いだ4人のうちの2人が担いで浜に行き捨てた。宝島の浜下り口という所にカマスに入れて捨ててあるのを見ると怖いものだった。

何のために竈を捨てたのか不思議だと話しているが、火の神の更新であろう。

24. 月（太陽）の糞

――っうりや、てぃだがなしぬ　くしゅぬ話や聞ちねーらんかや。

てぃだがなし（くしゅ）。てぃだがなしぬとぅし（くしゅ）。

――いんにゃ。

昔、あのー、くがねぃぬ　はんてぃたんち言ゅーむん　あたしが（だーちだれんが）。トゥビラかち。くがねぃぬ　はんてぃたんとぅ、うり取ぅるんちさんとぅ　なーかちむーてぃ行じゃんち。

うり　あらむされぇー。くがねぃや、はんてぃるんはず　ねーしがやっ。

昔ちゅぬ　言ちゃんくとぅ　されー。トゥビラぬ　でぃんとがら　あてぃねーしが。ショージ石ぬ　向こう、あんめぃぐらーだーがら。トゥビラち言ゅーしが　だーぬトゥビラがら解らんせねー。

トゥビラかちくがねぃぬ　はんてぃたんとぅ。くがねぃ　かし取ぅるんちさんとぅ取ぅるんち　かし取ぅるん　さんとぅ、さーかち　じーとぅ　すぃな　さーかち　むーてぃ行じゃんち（笑い）。

「うりや　ぬが」ち言ちゃんとぅ。

「ちきがなしぬ　いんにゃ」ち（笑い）。

――ちきがなしぬ　いんにゃ。

ちきがなしぬ　いんにゃちがら、てぃだがなしぬ　いんにゃちがら　言ゅーたんで。

――セーし　しくるんち　さんとぅ。

セッし　しくるんち　さんとぅ。手ぃしがら　すくるんち　さんとぅ。じんしょかち　むーてぃ　行じゃんち。

やっぱり　うーしまきゃなま　うんしゅん例ぬ　あーむや　あたやー。

いちか、何か、金が銅かなてぃ　金ぃぎりにしか　引きちきりゅしが、やっぱりセんきゃ　うっしゅむんきゃし　しくゆんち　さんてぃや　なーかち　むーてぃ　行じゃんち　言ゅーり。

（意訳）「太陽の糞の話は知っていませんか」。「昔、黄金が落ちて来た」と言うものだった。トゥビラ（地名）のどこかに落ちて来た。取ろうとしたら、中にもれて行ったそうな。「それは何か」。「お月様の糞」と言っていたよ。

（解説）太陽の糞の伝承は、他に井之川（『池水ツル嫗昔話集』１４７頁）に記している。キヨ嫗は「月の糞」と伝承している。

25. 海豚が上がる

――グンジャぬあがたんくとぅぬ　あれるや。

ゐん、っいゃーきゃが　われんあり　あがんま　フンゴウウラかち　あがたんせぇ。

終戦後　あたわ。車。行きや。あま行じむーる切りぐだちちゃんせ。っわっきゃあーじゃだけや、わーきゃにむっちちゃしが。っわっ行きゃんご。わーヤな　をぅたしがやっ。終戦後、すぐん　あたんで。むーるグンジャ切ちち、１５しんちがら一斤１０しん（注）ちがらやっ。昔ぬ税金とぅりむん・・。

切りぐれー　あたんち。

何十ち。あら、また　グンジャち言ゅーむんや、てぃーちが　何ぐぁあてぃ、ぬーあてぃ　さーだてぃか　一番最後ぬ　むんたなま　グンジャちがら、フィトゥちがら。てぃーちが行きゅんがにし　てぃっちがあがたんとぅ、フンゴウウラみーあがたんち。

――うりやフィトゥ。

フィトゥ。フィトゥちがらグンジャちがらよ、先ぬむんぬ　てぃーちぬ　餌とぅてぃ　かーでぃか　なんぐぁ　かーでぃ　をぅんしこ　むーるに　かましゅんち。うがし　２０にしか　２０にま　かましゅむなてぃ。うがしなてぃ　うりが　あがりちけたんげぃか　あがり。

（意訳）「鯨が上がったことはありませんか」。フンゴウの浦（地名）に終戦後だろうか、あがった。自由に切り取ってきた。１斤１５銭かした。父が自分に肉を持ってきた。話ではイルカのようである。何十もあがったそうだ。

注

１）鯨と海豚を混同していたようだ。１斤が１０銭か１５銭であれば戦前の単位であり、終戦後のアメリカ統治（昭和２１年２月２日）以前の時期ということになる。

誰かが日記にでもつけてないかなあ。

26. 鯨が佐渡にあがる

ちゅけりや、グンジャや、鯨や　サードゥンバリかち　あがてぃえっ。あがてぃ、サードゥンバリちゅが　切りぐんび　しーあたしが。

――うりや、くぁーむんが　あれたわ。

くぁーむんが　あたんがら、ぬーがら。

「グンジャぬあがたん」ち言ち。サードゥンバリちゅんきゃ　むーる　うむさんち　うべぃぬ　あんで。

（意訳）一度は井之川の佐渡にも上がり、佐渡の人々が切り積んであったそうな。上がったという記憶だけはある。

蛋白源の少ない島人にとって海からの寄り物であり、ネラ（龍宮）の贈物だったろう。

27. 父の好み

っわっきゃキシトゥミ爺（父・喜志富）や、あんまりよ　うっしゅむ　いるいるさんちゅあてぃ。「あっしゅむ・（小声で不明）・」ち言ちえっ。

フィトゥんきゃまえっ、「あっしゅむ　あんまり・・」ち言ち、こーてぃ　かまだたんちよ。うしゅむやよ、好でぃ　こーいやさんご。

くんでや、また　牛んきゃ　くっしゅんちか。片しねぃ　うんなり　ティルな　はんぎぃてぃちやっ、フーナベィな　たんがちよ、かましゅんちゅ（時計の時報が入り聞き取れない）。

十斤ま、二十斤ま　片しねぃうんなりふねぃせーせ　こーてぃち　フーナベィみー　たんがち　しじてぃえっ。かまち、かーでぃぬ　めぃじぬ　あんで。

（意訳）父は、いろいろな物に飛びつく人ではなかった。イルカ肉なども「あまり・・」と言って好まなかった。ところが、牛を屠したと聞いたら片足分も買ってきて大鍋に炊いて食べさせる人だった。

28. 犬や鼠は龍宮から

――インやネィラぬ国からちゃんち聞ちんきゃ　ねーらんかや。

わーっ知ら。

――ネィジミま。

ネィジミま？ほーっ。

（意訳・解説）沖縄で言うネリヤをネィラ、ネラと言う。稲穂由来の関係で犬、猫、鼠は龍宮から来た話がある。「知らない」と言う。

29. 朝露夕露

――アサツユ、ユウツユち言ゅん　まんまくぁぬ話んきゃ　うべいじゃせらんせ。

アサツユ、ユウツユ。アサツユ、ユウツユ、聞ちゃん　うべぃぬ　あんがにしゅしが。

――ままっくぁぬ　いきゃしか　さんち。

まんまぐぁ　あんぎぃや。

（意訳）継子話の人物だ。「聞いたように思う」とだけしか覚えていない（「朝星夕星」を『池水ツル嫗昔話集』に掲載している）。

30. おわりに

シマは井之川という集落である。シマの民俗文化をインテンシブに記録してみようとフィールドワークを重ねている。一人から御教示いただいた民俗事象を別の人にも確かめる形である（注１）。また、シマグチ（島口、方言、注２）の記録も重ねている。思うようにはすすまないが、いつか見えてくるのもあるだろう。

注

１）１９９０（平成２）年１月１日１７時から上野チル嫗から御教示いただいている。

「徳之島民俗文化の事例～井之川上野チル嫗の御教示から」として『徳之島郷土研究会会報』第29号（2007年度中発刊予定）に投稿。民話が中心であ

る。

２）方言表記は正確でない。夕食のことを「ゆぅうぃ」と記してあるが、「っゆふぃ」にも聞こえる。話しのながれでも変わっているかもしれない。

中本正智著「徳之島井之川方言の語彙」『琉球の方言　奄美徳之島井之川』（法政大学沖縄文化研究所1979年30頁所収）ではｊｕφｉ（夕食）と記しており、ｉの上に点が２つ付く。「ふ」や「う」ではなさそうで特殊発音であるようだ。他の語彙にもあると思うが、後は専門家にまかすしかない。